The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

「詠懐詩」における神仙

鷹橋明久

「詠懐詩」には神仙を題材とした詩がかなり見られる。そのため、これまでにも、先人のいくつかの論文に、阮籍における神仙とは如何なるものか言及したものが見られる。ここでその主なものを紹介すると、

「阮籍[1]にとって神仙の世界は人間の悲しみと懼れを超克した真實の世界、その真實を象徴する世界であった。」

「(阮籍の)俗事を厭う心が脱俗・隠遁を志向させ、そして生命の儚さ・無情を傷む心が求仙の心をかきたてる。」

などである。私は阮籍の神仙に関する詩を、

(一)仙界の様々な風物を見たり、仙人と交流したりして、あたかも自分自身が仙界に遊んでいるかのごとく詠じられたもの。

(二)神仙への懐いを詠じたもの。

のように分類し、(一)、(二)について「詠懐詩」と「詠懐詩」以前の詩をそれぞれ比較し、そこで浮かび上がった「詠懐詩」における神仙の特徴について考察してみようと思う。

(一)仙界に遊んでいるかのごとく詠じられたもの。

I. 「詠懐詩」

1 世務何繽紛　　世務 何ぞ繽紛たる
2 人道苦不遑　　人道 遑(いとま)あらざるに苦しむ
3 壯年以時逝　　壯年 時を以て逝(ゆ)き
4 朝露待太陽　　朝露 太陽を待つ
5 願攬羲和轡　　願はくは 羲和の轡(たづな)を攬(と)り
6 白日不移光　　白日をして光を移さざらしめん
7 天階路殊絶　　天階 路 殊絶す
8 雲漢邈無梁　　雲漢 邈(はるか)にして梁(はし)なし
9 濯髪暘谷縝　　髪を暘谷の縝に濯(あら)ひ
10 遠遊崑岳傍　　崑岳の傍に遠遊す
11 登彼列仙岨　　彼の列仙の岨(そ)に登り
12 採此秋蘭芳　　此の秋蘭の芳を採らん
13 時路烏足争　　時路 烏(なん)ぞ争ふに足らん
14 太極可翺翔　　太極 翺翔(こうしょう)すべし(「詠懐詩」三五)

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

この詩は、こまごまとしたわずらわしいことや、時間の移りゆくことなど、現實世界における憂いをふりほどいて仙界に遊ぶ、というものである。

1 危冠切浮雲　危冠 浮雲に切り
2 長劍出天外　長劍 天外に出づ
3 細故何足慮　細故 何ぞ 慮るに足らんや
4 高度跨一世　高く度りて 一世を跨ゆ
5 非子爲我御　非子 我が爲に御す
6 逍遙遊荒裔　逍遙 荒裔に遊ばん
7 顧謝西王母　顧みて 西王母に謝し
8 吾將從此逝　吾 將に此より逝かんとす
9 豈與蓬戸士　豈に蓬戸の子と
10 彈琴誦言誓　琴を彈じ誦して言誓せんや

（「詠懷詩」五八）

「危冠切浮雲　長劍出天外」は『楚辞』九章の「帶長鋏之陸離兮、冠切雲之崔嵬　被明月佩寶璐　世溷濁而莫余知兮」（長鋏の陸離たるを帶び、切雲の崔嵬たるを冠す。明月を被て寶璐を佩ぶ。世　溷濁して余を知ること莫し。）をふまえたもので、世の混濁を憂えたものと思われる。この詩は、現實社會のつまらないことに、いちいち氣をもむのはやめて、天地のはてである荒裔や西王母の住む崑崙山に遊ぶ、というものである。

1 北臨乾昧谿　北のかた 乾昧の谿に臨み
2 西行遊少任　西行して 遊ぶこと少く任にす
3 遥顧望天津　遥かに顧みて 天津を望み
4 駘蕩樂我心　駘蕩して 我が心を樂しましむ
5 綺靡存亡門　綺靡たり 存亡の門
6 一遊不再尋　一たび遊ぶも 再びは尋ねず
7 儻遇晨風鳥　儻し晨風の鳥に遇はば
8 飛駕出南林　駕を飛ばして 南林に出でん
9 滂濮瑤光中　滂濮たり 瑤光の中
10 忽忽肆荒淫　忽忽として 荒淫を肆にす
11 休息晏清都　休息して 清都に晏んぜば
12 超世又誰禁　超世 又誰か禁めん

（「詠懷詩」六八）

この詩の内容も、乾昧の谷や、清都などの仙界を思う存分に飛び回り、あまりの樂しさに、この樂しみは決して誰にも邪魔させないぞ、と述べたものである。

これらの三首には、いずれも、神仙の體を得て、西王母の住む崑崙山、天地のはてである荒裔、乾昧の谷、清都などの仙界を思う存分に遊覽する阮籍自身の姿が描かれており、遊仙詩的内容のものとなっている。

それでは、「詠懷詩」以前の遊仙詩的作品について見てみよう。

Ⅱ．阮籍以前の作品。

（1）前漢の詩。

前漢に作られた「樂府」としては、晉の崔豹の『古今注』

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

に採録された「薤露歌」、「蒿里曲」、「平陵東」と、王先謙などによって前漢の時代に作られたと想定されている「漢短箫鐃歌」十八曲があげられる。この中で「漢短箫鐃歌」十八曲の中の「上陵」をみてみる。

18 甘露初二年　　甘露初二年
19 芝生銅池中　　芝は 銅池の中に生ず
20 仙人下來飲　　仙人は 下り來りて飲み
21 延壽千萬歲　　壽を延ぶること 千萬歲

（『樂府詩集』巻十六）

この「上陵」は、たいへん長いので紙面の都合上、一から一七句まで割愛したが、その部分では、丘の上にのぼったり、また川辺の岸に下ったりして散歩しているうちに、川の中央からやってきたという客に出會い、その客に随って現實離れした仙界に遊んだことを歌っている。そして、最後の一八句から二一句で、そのことについて説明を加えている。「甘露初二年、芝は銅池の中に生ず、仙人下り來りて飲み、壽を延ぶること千萬歲。」つまり、甘露二年（前五二年）の銅のあまだれの中に芝が生えた、という瑞祥にともない、仙人が仙界から降りてきて、自分を不老不死の仙人にしてくれた、というのである。

次に後漢の時代に書かれたものを見てみよう。

（2）後漢の詩。

後漢の遊仙詩としては、「長歌行」、「董逃行」、「善哉行」、「步出夏門行」、「王子喬」があるが、ここでは「長歌行」を擧げる。

1 仙人騎白鹿　　仙人 白鹿に騎る
2 髮短耳何長　　髮は短く 耳は何ぞ長き
3 導我上太華　　我を導きて 太華に上り
4 攬芝獲赤撞　　芝を攬り 赤撞を獲る
5 來到主人門　　來りて 主人の門に到り
6 奉藥一玉箱　　藥の一玉箱を奉る
7 主人服此藥　　主人 此の藥を服(の)まば
8 身體日康彊　　身體は 日に康彊ならん
9 髮白更黑　　髮の白きも黑きに更(かは)り
10 延年壽命長　　年を延ばして 壽命は長からん

（『樂府詩集』巻三十）

この詩は、神仙に導かれて仙界へ仙藥をとりにゆき、主人のもとにそれを持ち歸り、主人の延年長生を願う、という内容になっている。後漢の遊仙詩においては、この「長歌行」に代表されるように、神仙とは不老不死をかなえてくれる存在としてとらえられており、作者の神仙への關心は、やはり前漢の「上陵」に同じく、神仙のもつ「不老不死」という面にあるようである。それでは、三国魏のものはどうであろうか。遊仙詩人としても有名な曹植のものを見てみよう。

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

（3）魏の遊仙詩。

1 閶闔開　　閶闔（しょうかい）開き
2 天衢通　　天衢（てんく）通ず
3 被我羽衣乘飛龍　　我が羽衣を被て　飛龍に乗る
4 乘飛龍　　飛龍に乗り
5 與僊期　　僊と期す
6 東上蓬萊採靈芝　　東のかた蓬萊に上り　靈芝を採り
7 靈芝採之可服食　　靈芝は　之を採りて服食すべし
8 年若王父無終極　　年は　王父の若く終極無し

（曹植「平陵東行」『樂府詩集』巻二八）

天上界の門が開いたことによって飛龍に乗り、仙界に行く。そこで仙人に出會い、蓬萊山に行って不老長壽の藥である靈芝を食べると、東王父のように無限の命をもつにいたった、という内容の詩である。これも不老不死を求めて仙界に遊ぶというものである。

ここでは、「平陵東行」を資料に擧げたが、曹植にはこの他に「飛龍篇」、「五遊詠」、「仙人篇」、「遠遊篇」、「驅車篇」、「升天行」、「苦思行」、「遊仙詩」、「桂之樹行」などの「遊仙詩」が見られる。これら（「平陵東行」を含めた）十作品のうち、この「平陵東行」の八句のように、不老不死への祈願の詩句が見られるものとして、「苦思行」、「遊仙詩」、「桂之樹行」を除く七作品がある。また彼の父である曹操の遊仙詩的作品「氣出倡」、「陌上桑」にもやはりそれは見られる。

このように、阮籍以前の「遊仙詩」には、不老不死を祈願する詩句が頻繁に見られ、詩末に、ほとんどきまり文句のように用いられていた。そうして、阮籍の詩のように、詩中に現實世界に對する自己の不滿をそれとなく訴えかけたようなところはほとんど見られない。（曹植「五遊詠」の「九州不足步」、「仙人篇」の「九州安所如」、「遠遊篇」の「中州非吾家」に見られるが、わずかであり、素朴かつ簡単なものである。）

これらのことからも、阮籍以前の「遊仙詩」は基本的に不老不死を祈願するという目的のもとに作られたものと考えられる。

それに對して、阮籍の遊仙詩的作品には、不老不死を祈願する詩句が全くといってよいほど見られなかった。現實世界に對する自己の不滿を具體的に述べた部分「「詠懷詩」其の三五の一句から八句、其の五八の『楚辞』九章をふまえる一、二句と九、一〇句、其の六八の五から八句、特に其の六八の七、八句には、黄節が「詩言『儻遇晨風鳥、飛駕出南林』、以晨風喩從晉諸臣、彼出北林而我出南林、不與之同途」（詩に『儻遇晨風鳥、飛駕出南林』と言ふは、晨風を以て晉に從ふ諸臣に喩へ、彼は北林に出づるも我は南林に出で、之と途を同じうせざるなり。）と述べるように寓意があると思われる。」が目立ち、詩の内容も主に、嫌惡すべき世俗から解放されて、仙界を遊覽することを夢見たものである。このことからも、阮籍は神仙のもつ不老不死という側面にはあまり關心をもっておらず、それより、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

現實逃避の欲求に基づいてこれらの詩を創作したことが窺える。

（二）神仙への懐いを詠じたもの。

これは、仙界を思う存分遊覽する阮籍を詠った（一）とは、かなり様子の異なるものである。阮籍の神仙への懐いは、

（1）神仙はなんとしてもいてほしいのだが、實際に會ったことがないので不安である。

（2）神仙は仙界にはいると思うが、世俗（今の世の中）には降りてこない。

（3）その他。

に分類される。

I．「詠懐詩」

（1）神仙はなんとしてもいてほしいのだが、實際に會ったことがないので不安である。

1 夏后乘靈輿　夏后 靈輿に乘り
2 夸父爲鄧林　夸父 鄧林と爲る
3 存亡從變化　存亡 變化に從ひ
4 日月有浮沈　日月に 浮沈有り
5 鳳凰鳴參差　鳳凰 鳴くこと參差たり
6 伶倫發其音　伶倫 其の音を發す
7 王子好簫管　王子 簫管を好み
8 世世相追尋　世世 相追尋す
9 誰言不可見　誰か言ふ 見るべからずと
10 青鳥明我心　青鳥よ 我が心を明らかにせよ

（「詠懐詩」二二）

鳳凰の鳴き声が、黄帝のために鳳凰の鳴き声で樂律を作ったという伶倫、たくみに笙を吹いて鳳凰の鳴くような音をたてたという王子喬を經て今の世に伝えられているということから、神仙の存在を證明しようとしている。しかし、九、十句「誰言不可見　青鳥明我心」に見られるような不安と動揺は隠し得ない。

1 天網彌四野　天網 四野に彌り
2 六翮掩不舒　六翮 掩はれて舒びず
3 隨波紛綸客　波に隨ふ 紛綸の客
4 汎汎若浮鳧　汎汎として 浮かべる鳧の若し
5 生命無期度　生命 期度無く
6 朝夕有不虞　朝夕 虞られざる有り
7 列仙停脩齡　列仙は 脩齡を停め
8 養志在沖虛　養志は 沖虛に在り
9 飄飄雲日間　雲日の間に飄飄し
10 遐與世路殊　遐かに 世路と殊なる
11 榮名非己寶　榮名 己が寶に非ず
12 聲色焉足娛　聲色 焉んぞ娛しむに足らん
13 採藥無旋返　藥を採るものは 旋返するなく
14 神仙志不符　神仙 志は符はず
15 逼此良可惑　此に逼られて 良に惑ふべし

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

16　令我久躊躇　　我をして久しく躊躇せしむ

（「詠懐詩」四一）

まず、一、二句は『老子』の「天網恢恢、疏而不失」をふまえて六句へとひきつがれ、乱れた世の中なので、朝夕にかかわらず、いつ命を失うことになるか分からないと述べる。次に長命で自由氣ままにさすらうことのできる神仙の姿を描き、神仙へのあこがれを述べる。しかし、十三句、十四句で、神仙になろうとして藥をとりに行ったものの、歸ってきたものはいないし、神仙の書もくいちがいだらけだと述べ、「逼此良可惑　令我久躊躇」と果たして本當に神仙などいるのだろうか、と動揺する阮籍の様子が描かれている。

1　昔有神仙士　　昔　神仙の士
2　乃處射山阿　　乃ち　射山の阿に處る
3　乘雲御飛龍　　雲に乘りて　飛龍を御し
4　噓噏嘰瓊華　　噓噏して　瓊華を嘰ふ
5　可聞不可見　　聞くべくも　見るべからず
6　慷慨嘆咨嗟　　慷慨し　嘆きて咨嗟す
7　自傷非疇類　　自ら疇類に非ざるを傷めば
8　愁苦來相加　　愁苦來りて　相加ふ
9　下學而上達　　下學して　上達せんか
10　忽忽將如何　　忽忽として　將た如何せん

（「詠懐詩」七八）

「神仙はいた。」という伝説は殘されているが、神仙を實際に目で確かめることはできない。だから神仙に仙界へと誘われ、神仙になることはあまり期待できそうにない。自分が神仙の類いではないことをわきまえているので憂いが生じるいっぽうである。こうなると、神仙になるには、手じかなところから學習して仙道の奥義をきわめてゆくしかないのだが、いったいどうしてよいものやら、と途方にくれる阮籍の心情が現れている。

これら三首は、いずれも何としても神仙の存在を信じたいのだが、神仙に出會ったことがないので不安で仕方がない阮籍の心情を表したものである。また、「詠懐詩」其の二二の九、十句、其の四一の十五、十六句には、何としても神仙（を信じたい）に出會いたいという懐いが、「詠懐詩」其の七八の九、十句には、神仙に出會うことがかなわないなら、仙術を體得してでも神仙になるのだという阮籍の強い氣持ちが、こめられている。このように阮籍が強く神仙を求めるのは、其の四一の一句から六句に見られるような世俗に對する強い嫌惡があるからだと思われる。こうした耐え難い世俗への嫌惡は、神仙が降りてこない要因を、そのことに転嫁せしめる詩をも生み出している。次に擧げた「詠懐詩」其の一〇、二六はそのような詩である。

（2）神仙は仙界にはいると思うが、世俗（今の世の中）には降りてこない。

1　北里多奇舞　　北里には　奇舞多く
2　濮上有微音　　濮上には　微音有り

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

3 輕薄閑遊子　輕薄の閑遊子
4 俯仰乍浮沈　俯仰し 乍ち薄沈す
5 捷徑從狹路　捷徑より 狹路に從ひ
6 僶俛趣荒淫　僶俛として 荒淫に趣く
7 焉見王子喬　焉んぞ見ん 王子喬の
8 乘雲翔鄧林　雲に乘りて 鄧林に翔けるを
9 獨有延年術　獨り延年の術有れば
10 可以慰我心　以て我が心を慰むべし

（「詠懷詩」一〇）

王子喬の伝説があるように、昔、神仙はいた。しかし、今となってはもう見ることはできないと詠っている。その要因は、一句から六句に記されている。「北里多奇舞」の「北里」は殷の紂王の爲した舞樂の名で『史記』殷本紀の「（紂）好酒淫樂、嬖婦人。於是使師涓作新淫聲北里之舞、靡靡之樂。」（（紂）酒淫樂を好み、婦人を嬖す。是に於て師涓をして新淫聲の北里の舞、靡靡の樂を作らしむ。）をふまえている。また「濮上有微音」も『禮記』樂記の「桑間濮上音、亡國之音也」をふまえ、頽廃的、亡國的な状況であることを詠っている。そして、三句から六句にはこのような状況の中で、李善が「輕薄之輩、隨俗浮沈。棄彼大道、好從狹路。不尊恬淡、競赴荒淫。」（輕薄の輩、俗に隨ひて浮沈す。彼の大道を棄て、好みて狹路に從ふ。恬淡を尊ばず、競ひて荒淫に赴く。）と述べるような、大道を捨て、酒色に身をゆだねた輕薄で遊び好きな輩がはびこっていることを詠っている。このように、この詩では、現在のこうした混亂した世の中では、王子喬のような神仙が鄧林を天翔ることなど到底あり得ないだろう。ただ、延年の術が伝わっているので、これを信じることによって心を落ち着かせよう、という阮籍の懷いが述べられている。一方、「詠懷詩」二六は仙界の風物を例に擧げて、そのことを述べている。

1 朝登洪坡顛　朝に 洪波の顛に登り
2 日夕望西山　日夕 西山を望む
3 荊棘被原野　荊棘は 原野を被ひ
4 羣鳥飛翩翩　羣鳥は 飛ぶこと翩翩たり
5 鸞鷺特栖宿　鸞鷺 特り栖宿し
6 性命有自然　性命に 自然有り
7 建木誰能近　建木 誰か能く近づかん
8 射干復嬋娟　射干 復た嬋娟たり
9 不見林中葛　見ずや 林中の葛の
10 延蔓相勾連　延蔓して 相勾連するを

（「詠懷詩」二六）

三、四句の「荊棘被原野　羣鳥飛翩翩」は、何が起こるか分からない険悪で不吉な世相を心象風景で詠っていると思われる。そして、五句から一〇句には、そんな時期には、鸞鷺、建木、射干などは節操を守って誰にも近寄らず一人で居る、それだからこそ誰からも傷つけられることなく美しくいられるのだ、と詠じている。そのことを裏返せば、阮籍が生きている混濁した世俗には、傷つくことを畏れて

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

神仙は降りてはこない、ということになるのではないだろうか。

（2）のその他の詩は、神仙の世界を空想的に描きつつも、「やはり、世俗（私のもと）には神仙は降りてはこない。」と絶望的口吻をもらすものとなっている。

1 西方有佳人
2 皎若白日光
3 被服纖羅衣
4 左右珮雙璜
5 脩容耀姿美
6 順風振微芳
7 登高眺所思
8 擧袂當朝陽
9 寄顏雲霄間
10 揮袖凌虛翔
11 飄颻恍惚中
12 流眄顧我傍
13 悅懌未交接
14 晤言用感傷

西方に 佳人有り
皎として 白日の光の若し
纖羅の衣を被服して
左右 雙璜を珮ぶ
容を脩めて 姿美を耀かし
風に順ひて 微芳を振ふ
高きに登りて 思ふ所を眺め
袂を擧げて 朝陽に當る
顏を雲霄の間に寄せ
袖を揮ひ 虛を凌ぎて翔る
飄颻 恍惚の中
流眄して 我が傍を顧みる
悅懌するも 未だ交接せず
晤言し 用て感傷す

（「詠懷詩」一九）

この詩は『漢書』外戚傳の有名な「李延年歌」、すなわち「北方有佳人、絶世而獨立。一顧傾人城、再顧傾人國。寧不知傾城與傾國、佳人難再得。」（北方に佳人有り、世を絶して獨り立つ。一顧すれば人城を傾け、再顧すれば人國を傾く。寧ろ傾城と傾國を知らざるも、佳人再びは得難し。）をふまえているが、神仙詩として再構成し直したものである。曹植「雜詩」其の四にも「南國有佳人、容華若桃李」とあるが、これは神仙詩ではない。ところで、この詩では「李延年歌」を彷彿させるなまめかしい佳人、すなわちここでは神仙が自分のすぐそばを飛んでおり、流し目にふりかえり自分の方を眺めもしたが、結局自分を置き去りにして飛んで行ってしまうことを詠じている。

1 東南有射山
2 汾水出其陽
3 六龍服氣輿
4 雲蓋切天綱
5 仙者四五人
6 逍遥宴蘭房
7 寢息一純和
8 呼嗡成露霜
9 沐浴丹淵中
10 炤耀日月光
11 豈安通靈臺
12 游瀁去高翔

東南に 射山有り
汾水 其の陽より出づ
六龍は 氣輿を服し
雲蓋は 天綱に切る
仙者 四五人
逍遥して 蘭房に宴す
寢息 一に純和
呼嗡 露霜と成る
丹淵の中に沐浴し
日月の光に炤耀さる
豈に通靈臺に安んぜんや
游瀁し 去りて高く翔る

（「詠懷詩」二三）

其の七八にも見られたが、「射山」とは藐姑射山のことである。この詩は『莊子』逍遥遊の藐姑射の神人の話「藐姑射之山有神人居焉。肌膚若冰雪、淖約若處子。不食五穀、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

吸風飲露、乘雲氣御飛龍、而遊四海外。」（藐姑射の山に神人の居有り。肌膚　冰雪の若く、淖約として處子の若し。五穀を食らはず、風を吸ひ露を飲み、雲氣に乘りて飛龍を御し、四海の外に遊ぶ。）を出典としている。福永光司氏は「生きとし生けるものに災禍なく疫病なく饑餓なき生の安らかな歡喜を謳歌させるというこの神人は、莊子の描く超越者のロマンチックな姿であるとともに、中国民族の思い描く最も理想的な人間像でもあろう」と述べられるが、其の一九と同様、この藐姑射山の神仙の様子を描いた後、九、十句で、どうして世俗（通靈臺：神仙に通じる臺。漢の武帝が甘泉宮に築いた通天臺のたぐい。）になど降りてこようか、ということを詠じている。

1　出門望佳人　　門を出て　佳人を望むも
2　佳人豈在茲　　佳人　豈に茲に在らんや
3　三山招松喬　　三山に　松喬を招くは
4　萬世誰與期　　萬世　誰と與にか期せん
5　存亡有長短　　存亡　長短有り
6　慷慨將焉知　　慷慨するも　將た焉んぞ知らんや
7　忽忽朝日隤　　忽忽として　朝日隤れ
8　行行將何之　　行き行きて　將た何にか之かん
9　不見季秋草　　見ずや　季秋の草の
10　摧折在今時　　摧折　今の時に在るを

（「詠懷詩」八（一））

其の一九と同様、「佳人」の語は神仙として用いられている。神仙はここにはいない。また、東海中の蓬萊、方丈、瀛州の三神山から赤松子や王子喬を招くようなことは、萬世を經ても誰も手助けはしてくれないのだから、自分達は滅びの道を一途にたどるしかないのだ、と詠じている。

これら（2）に擧げた五首は、神仙は存在するのだが、降りてはこないと述べたものである。では、なぜ降りて來ないのか。その要因は、「詠懷詩」其の一〇の一句から六句、其の二六の三、四句に述べられる。すなわち、「荊棘被原野、羣鳥飛翩翩」の混亂した危険な世の中には神仙は節操を高く持して近付こうとはしないということである。このような理論はほとんど見かけたことがないが、それでは、實際にこの時代には、神仙はどのような場合に人々のもとに降りてくると考えられていたのだろうか。マスペロは次のように述べている。

「はじめは、神々や仙人たちが、功德をつんだと認められる弟子たちを道に入れるために、みずから迎えにくる。しかし、いつまでもそれを待っているのは礼儀にもあわないし、また周到でもないであろう。人間の命は短く、神々が待ちぼうけを食わせるかもしれないからである。したがって、神々を探し求めに行って、かれらに到達するようにしなければならない。神々は熱意ある人々に對しては決して助力をこばまないのだから。しかし、神々をどこで見つけられるかを知ることがもう一つ必要となる。（中略）ただ幸いに、神々はしばしば地上におりてきて、山の洞窟に住んでいる。多くの山々や洞窟は、このように神々と仙人た

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

ちに、かりの住家として使われることで有名である。しかし、神々がそこに住むとはかぎらないし、また洞窟を発見したとしても、そこで神々に確實に會えるとはかぎらない。實は、神々や仙人たちも、彼らを心から求めている人々の教化に目をふさぐのではなくて、探求者の進境の程度に應じて、その助力に段階をつける。つまり、探求者は一歩一歩進んでゆかねばならないのであって、神々や仙人の地位、したがってその知識が、當の探求者にとって手の届く程度の教えを与えるくらいの神々や仙人以外には、決して受け入れられないのである。」

長々と引用したが、神仙が降りてこないのは探求者自身の脩行の問題であって、阮籍が言うような世俗の混亂如何とは何ら關わりがないとする。どうも腑に落ちないが、阮籍が神仙詩のなかでこれほどまでも世俗への嫌惡をいうのは、やはり、其の一〇に見られる大道を捨てた輕薄な人々への反感があまりに強かったことを示しているのだろう。

(3) その他。

1 人言願延年　人は言ふ　願はくは年を延ばさんことを
2 延年欲焉之　年を延ばし　焉にか之かんと欲する
3 黄鵠呼子安　黄鵠　子安を呼ぶは
4 千秋未可期　千秋　未だ期すべからず
5 獨坐山嵓中　獨り　山嵓の中に坐して
6 惻愴懷所思　惻愴して　思ふ所を懷ふ

7 王子一何好　王子　一に何ぞ好なる
8 猗靡相携持　猗靡として　相携持す
9 悦懌猶今辰　悦懌すること　猶ほ今辰のごときも
10 計校在一時　計校　一時に在り
11 置此明朝事　此を明朝の事に置かば
12 日夕將見欺　日夕　將に欺かれんとする

(「詠懷詩」五五)

1 王子十五年　王子は　十五の年
2 遊衍伊洛濱　伊洛の濱に　遊衍す
3 朱顔茂春華　朱顔は　春華より茂に
4 辯慧懷清眞　辯慧　清眞を懷く
5 焉見浮丘公　焉んぞ　浮丘公を見て
6 擧手謝時人　手を擧げて　時人に謝したる
7 輕蕩易恍惚　輕蕩　恍惚たり易し
8 飄颻棄其身　飄颻として　其の身を棄つ
9 飛飛鳴且翔　飛び飛びて　鳴き且つ翔る
10 揮翼且酸辛　翼を揮ひて　且く酸辛たり

(「詠懷詩」六五)

1 二妃遊江濱　二妃　江濱に遊び
2 逍遥順風翔　逍遥として　風に順ひて翔る
3 交甫懷環佩　交甫　環佩を懷き
4 婉孌有芬芳　婉孌として　芬芳有り
5 猗靡情歡愛　猗靡として　情に歡愛し

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

6 千載不相忘　千載　相忘れざらんとす
7 傾城迷下蔡　城を傾け下蔡を迷はし
8 容好結中腸　容好　中腸に結ぼる
9 感激生憂思　感激して　憂思を生じ
10 諠草樹蘭房　諠草（けんそう）　蘭房に樹（う）ふ
11 膏沐爲誰施　膏沐（こうもく）　誰が爲に施さんとし
12 其雨怨朝陽　其れ雨ふれよとて朝陽を怨む
13 如何金石交　如何ぞ　金石の交はりの
14 一旦更離傷　一旦　更に離傷する

（「詠懷詩」二）

（3）の詩については後述する。阮籍の神仙に關する詩は、（一）遊仙詩的なもの、（二）神仙への懷いを述べたもの、の二つに分けることができるが、どちらかというと、（二）が主であった。では、ここで阮籍以前の詩についても見てみよう。

Ⅱ．阮籍以前の作品。

1 驅車上東門　車を上東門に驅り
2 遥望郭北墓　遥かに郭北の墓を望む
3 白楊何蕭蕭　白楊　何ぞ蕭蕭たる
4 松柏夾廣路　松柏　廣路を夾む
5 下有陳死人　下に　陳死の人有り
6 杳杳即長暮　杳杳として　長暮に即く
7 潛寐黄泉下　黄泉の下に潛かに寐ねて
8 千載永不寤　千載　永く寤めず
9 浩浩陰陽移　浩浩として　陰陽移り
10 年命如朝露　年命　朝露の如し
11 人生忽如寄　人生　忽として寄するが如く
12 壽無金石固　壽は　金石の固き無し
13 萬歲更相送　萬歲　更〻相送り
14 聖賢莫能度　聖賢　能く度（こ）ゆる莫し
15 服食求神仙　服食して　神仙を求むれば
16 多爲藥所誤　多くは　藥の誤る所と爲る
17 不如飲美酒　如かず　美酒を飲みて
18 被服紈與素　紈（がん）と素を被服せんには

（「古詩十九首」一三『文選』巻二九）

人の命は朝露のごとくはかないものである。これは、聖賢とてまぬかれえない運命である。神仙を求め、その藥に誤って身を失う人が多くいるが、そんな無益なことはやめ、美酒を飲み、美しい着物をまとい、現世で樂しい日々を送ろうではないか、と詠じている。「古詩十九首」其の一五も同趣旨である。それでは、魏の時代の作品はどのようであろうか。

1 厥初生　厥（そ）の初めて生ぜしより
2 造化之陶物　造化の陶物は
3 莫不有終期　終期　有らざる莫く
4 聖賢不能免　聖賢すら　能く免れざらん
5 何爲懷此憂　何爲れぞ　此の憂を懷かん

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

6 願螭竜之駕　螭竜の駕を願ひ
7 思想昆崙居　昆崙の居を思想す
8 思想昆崙居　昆崙の居を思想するも
9 見欺於迂怪　迂怪に欺かる
10 志意在蓬萊　志意は蓬萊に在るも
11 周孔聖徂落　周孔の聖すら徂落せり
12 會稽以墳丘　會稽は墳丘を以てす
13 會稽以墳丘　會稽は墳丘を以てするも
14 陶陶誰能度　陶陶として誰か能く度らん
15 君子以弗憂　君子以て憂ひを弗はん
16 年之暮奈何　年の暮に奈何せん
17 時過時來微　時過ぎ時來りて微ふるなり

（曹操「精列」『樂府詩集』巻二六）

造化の主の造りたもうたものは、いつか必ず滅びる時がくる。それは聖賢とて免れることのできない運命なのだ。そこで、仙界を夢見るが、周公、孔子、禹王といった聖人も肉體は滅びて今はないことに思いをいたすと、夢は醒め、現實をまざまざと見せつけられる。やはり、神仙になろうとするのは、はかないあがきにすぎず、人間は時間の推移には逆らうことはできない、というのである。曹操には、神仙への懐いを述べた詩として、他に「秋胡行」があるが、これも「存亡有命、慮之爲蚩」とあるように、人の壽命ははかなく、仙人の壽命など求むべきもないことをいって、神仙を追求することの虚しさを嘲笑する内容になっている。

この他には、曹丕の「折楊柳行」があるが、この詩は、二四句で構成されており、前半十二句は、仙界に行き、二人の仙童から仙藥を受け取り、それを服用して仙術を得、仙界を遊覽するという内容である。それに對して、後半十二句は、一貫して神仙の存在を否定し、「百家　迂怪多し、聖道のみ　我の觀る所ぞ」と述べ、神仙思想を嚴しく非難したものとなっている。

このように、阮籍以前の神仙への懐いを詠じた詩は、神仙の存在を否定する立場で詠じられており、比較的あっさりした内容のものとなっている。これに對し、阮籍のものは、「詠懐詩」其の二二の「誰言不可見、青鳥明我心」や其の四一の「逼此良可惑、令我久躊躇」などの句に象徴されるように、神仙の有無をめぐり不安に揺れ動く心中を描いたものとなっている。他の詩人には見られない、どうしてもいてほしいと神仙の存在を強く願う態度が窺えるのである。

では、阮籍が他の詩人と比べ、ここまで神仙の存在の有無に固執したのはなぜだろうか。さらに、（一）の特徴、すなわち、阮籍は神仙のもつ不老不死という側面にあまり關心を寄せていない（これは、（二）の詩にも言えることである。）のはなぜだろう。

ここで、②の（3）の「詠懐詩」其の五五、六五、二をもう一度見てみよう。

其の五五、六五は、『列仙伝』の記述によると、周の霊王の太子であり、道士の浮丘公に連れられて嵩高山に登り、

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

仙人となった王子喬について詠じたものである。其の五五は、王子喬は道士の浮丘公につれられて登仙したが、決斷することを明朝まで引き延ばせば、欺かれてしまうぞ、というもの。其の六五はなぜ、十五歳の王子喬は世の人々に別れを告げて、神仙になってしまったのか、ならないほうがよかったのに、というものである。いずれも、神仙になる以前の太子晉のことを題材としてとりあげており、神仙詩であるにもかかわらず、人間味の強く感じられる作品である。其の二も『列仙伝』の江妃二女の説話をふまえたものだが、原典とは異なり、二人の神仙の女性が現實社會の人間（鄭交甫）と堅いちぎりを結んだものの、結局戀破れ、悲しみにうちひしがれるという、およそ神仙の姿とは想像しがたい神仙が詠われている。このように、これらの三首には神仙への同情、あるいは憐れみなどが詠われており、人間を超越して存在する神仙と言うより、むしろ強く人間臭さをただよわせた神仙が詠われている。また、先述の「詠懐詩」其の一九も、出典である「李延年歌」では美しい人間の女性であったものを無理にとまでは言わないが、神仙としてとらえ直したものである。そうすると、同じく「佳人」を詠った其の八〇や、福永光司氏によって「中国民族の思い描く最も理想的な人間像でもあろう。」と評された藐姑射山の神人を詠った其の二三、七八、王子喬を詠った其の一〇、二二もどうしても氣になるところである。このように、阮籍の詠う神仙は、あくまでも純粋な神仙ばかりではなく、意識的に神仙に人間性を付加しているように思えるものもあるのである。神仙詩の中で阮籍が神仙の存在の有無に執拗なまでにこだわり、「不老不死」についてはほとんど言及していないのも、そのことと關わりがありはしないだろうか。

魯迅は「阮籍は文章も詩も大變上手だった。彼の詩文も慷慨激昂してはいるが、多くの意味はみな表面から隠されている。宋の顔延之が、すでによくわからないと言っているが、我々にいま彼の詩が理解できないのは當たり前である。彼は詩のなかでも神仙を語っているが、ほんとうは信じてなどなかった。」と述べている。私はそれに加えて、「詠懐詩」の中で詠われる神仙には、現實逃避の欲求を満たし得る神人としてよりも、阮籍が嫌悪する醜悪な世俗を粛正するほどの至高至大の徳と功をあわせもつ人物像が重ね合わされているのではないか、と考える。

一つ一つの詩について考證してゆくことは、紙面の都合もあり、非常に困難なので、最後にするが、其の五五に關しては、神仙になった王子喬が明朝になぜ、誰に欺かれるというのかという点、其の六五に關しては、阮籍が神仙になった王子喬の境遇をなぜ悲しまなければならないのか、という点でそれぞれ疑問が殘る。黄節、蔣師爵はこの王子喬について、魏の危機的状況を救おうとして立ち上がったものの、司馬氏の手にかかって殺害された魏の五代皇帝高貴鄉公髦のことだと指摘している。付會が多いとされる両者の注釋であるが、ここでの説はとるべきものがある。

高貴鄉公は司馬師が魏の政權をとりやすいようにするた

NII-Electronic Library Service

The Society of Chinese Literature of the Middle Ages

めに立てた皇帝である。即位した時、年は十五（其の六五に「王子十五年　遊衍伊洛濱」とある。）であった。しかしながら、學問を好み、英明の主として颯爽としており、言葉ははっきりととおり、また、『魏氏春秋』の中で鍾會が、「才は陳思に同じく、武は太祖に類す。」と評したほどの優れた人物であったようである。

この高貴鄕公が二十才の時（二六〇）、權力が日に日に王室から離れてゆくのを見て、怒りに堪えず、侍中の王沈、尚書の王經、散騎常侍の王業を召し、司馬昭（この時、司馬師は既に死去。）を殺し、魏室を再興するという計畫をうちあける。しかし、王沈、王業が司馬昭のもとへと走り、それを報告したため、司馬昭はすぐにこれに對する備えを行った。こうして、翌朝、帝は數百人の下僕を率い、軍鼓をうちならして出擊したものの、時すでに遲く、結局、高貴鄕公は太子舍人の成濟にうちとられてしまった。（其の五五に「置此明朝事　日夕將見欺」とある。）

このように、史實に照らし合わせてみても、「詠懷詩」其の五五、六五は、やはり、司馬師によって皇帝となり、魏王室を復興しようとしたものの、身内の裏切りにより殺されてしまった高貴鄕公の死を悼んだものとしてうけとめるべきではないだろうか。

［注］

①福永光司「阮籍における懼れと慰め―阮籍の生活と思想―」東方學報二八冊

②松田稔「阮籍「詠懷詩」八十二首における求仙の位置」

③福永光司『莊子』朝日新聞社

④アンリ・マスペロ・川勝義雄訳『道教』平凡社東洋文庫

⑤『魯迅全集』第三巻―人民文學出版社

⑥其五五に關しての蔣師爵注「按《三國志》高貴鄕公甘露五年注「帝見威權日去、召王沈、王經、王業、謂・・『司馬昭之心、路人所知也。吾不能坐受廢辱。今日當與卿自出討之』經曰・・『昔魯昭不忍季氏、敗走失国、爲天下笑。今權在其門久矣。陛下何所資用』帝曰・・『行之決矣。正復死何所懼』於是入白太后。沈、業奔告文王、文王之備。帝遂率僮僕數百鼓譟而出。賈充逆帝、戰於南闕下、帝自用劍、衆欲退、成濟曰・・『事急矣。當云何』充曰・・『畜養汝輩、正爲今日』濟乃抽戈犯蹕」《晉書・文帝紀》・・「天子以帝三世宰輔、政非己出、又慮廢辱、將臨軒而行放黜、夜召沈、業、出懷中詔示之、戒嚴俟旦。沈、業馳告於帝、帝召賈充爲之備。天子知事泄、率左右攻相府」詩謂『延年焉其六五に關しての黄節注・・・「・・・蓋此詩傷高貴鄕公而作也。《魏志》高貴鄕公卒言二十、在位凡六年。則即位之時年當十五。詩中稱其辨慧、如志載帝幸太學問諸儒事可證。陳壽評曰、『高貴公才慧夙成、好問尚辭、然輕躁忿肆、自蹈大禍。』則詩言輕蕩棄身、匪高貴其何指。・・・」

NII-Electronic Library Service